



ふくしま復興塾

福島から未来の  
新しいカタチをつくろう

2013年度  
ふくしま復興塾事業報告書

## 目 次

---

1	2013年度ふくしま復興塾概要 .....	2
2	プログラム実施報告 .....	3
3	ウクライナフィールドワーク報告 .....	9
4	最終発表会報告 .....	15
5	実施結果 .....	28

# はじめに



ふくしま復興塾実行委員長

**加藤 博敏**

福島を襲った未曾有の災害は放射線という深刻な被害をもたらし、未だその収束は見え、未だ福島の未来を想像することはできません。

福島を去る人、残る人、家族がばらばらになってしまう人、仕事を失う人、様々な人達があります。その過酷な運命の中で、今も厳然として福島で生まれ育つ若者達があります。

逆境が人を作ると言います。そして今の福島以上の逆境はありません。だとすれば福島からは将来有為な人材が生まれるはず。もっと言えば生まれて、その人達が福島の未来を創ってゆかなければなりません。

福島の逆境が、福島や日本を作る未来の英雄を育たなければ、福島に生きる人の過酷な運命とのバランスが取れません。

かつて幕末北越戦争戊辰戦争の一つで敗れた長岡藩は滅亡され、実収にして6割を失って財政が窮乏し、藩士たちはその日の食にも苦慮する状態でした。このため窮状を見かねた長岡藩の支藩から百俵の米が贈られることとなりました。藩士たちは、これで生活が少しでも楽になると喜びましたが藩の大参事小林虎三郎は、贈られた米を藩士に分け与えず、売却の上で学校設立の費用とすることを決定しました。藩士たちはこの通達に驚き反発して虎三郎のもとへと押しかけ抗議しますが、それに対し虎三郎は、「百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭しました。これが越後の米百俵のいわれです。

このプロジェクトは、「福島の米百俵」福島の若者を育てるプロジェクトです。福島の若者に「本物」に出会う機会を作り、そこから福島の若者が刺激を受け、大きく育つ。

「30年後の英雄は福島から出る」ということを信じて、このプロジェクトをスタートしたいと思います。

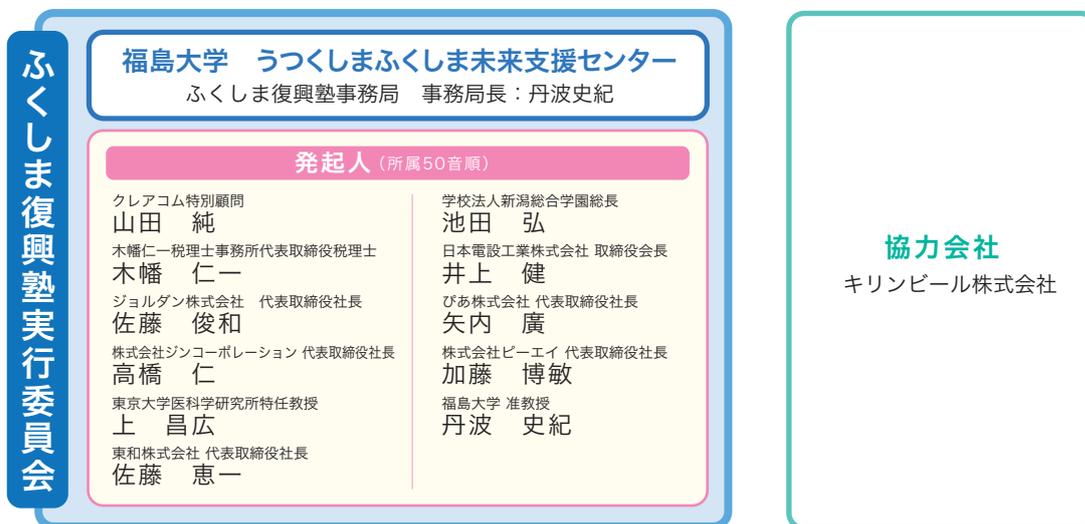
## 1-1 ■ 背景と目的

福島県は、2011年3月11日の地震・津波、さらに翌日の原発事故後、世界に類を見ない危機的な状況に瀕しています。そんな福島も、震災後2年以上が経過し、地域による差はあるものの、ある程度復旧フェーズは終えたといえるでしょう。今後の福島は、経済・文化・政策等多様な分野で復興のフェーズに入らなければなりません。しかし、復興を進めていくリーダーとなる若い人材は不足しています。また、福島の課題は日本や世界の課題と行うことができ、福島の課題を解決することは、世界的にも大きな意義があるといえることができます。

このような背景からふくしま復興塾は、①福島の現状を捉えた上で、福島復興に取り組む志と覚悟を持ったリーダーを育成する、②人類史上稀に見る原発災害が発生した福島だからこそ、顕在化してきたニーズや課題を解決する事業を起こす、の2点を目的として開講しました。

## 1-2 ■ 組織

ふくしま復興塾は、福島に縁のある経営者を中心とする発起人の呼びかけのもと、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター内に事務局を置き発足しました。



## 1-3 ■ 企画概要

2013年度のふくしま復興塾は、起業家・大手企業の社員・行政職員・NPO職員・学生といった多様な分野の若者25名を塾生として迎えました。5月18日の開講以来、12月14日の最終発表会まで、基本的に月2回土曜日の午後、郡山情報ビジネス専門学校様の教室をお借りして行いました。

# 2 プログラム実施報告

2013年度のプログラムは、前半の「福島を知る」フェーズとして、浪江町フィールドワーク・現場の人や専門家の講義・ウクライナフィールドワーク等を実施しました。その後、後半の「事業立案」フェーズでは、講師やメンター陣からのフィードバックを受けながら、各自が解決したい福島の課題の解決案を検討しました。

日付	担当	内容
5月18日	ふくしま復興塾事務局	ガイダンス
6月1日	福島県庁 玉川 啓 様 浪江町役場 小林 直樹 様	浪江町フィールドワーク
6月15日	伊達市役所 半澤 隆宏 様	講義：「伊達市の除染」について
	東京大学医科学研究所 上 昌広 様	講義：被災者たちの地域復興
7月6日	よつば保育園 近藤 能之 様 福島大学 奥本 英樹 様 福島大学 林 薫平 様 福島大学 開沼 博 様	「子供」、「産業」、「食」、「コミュニティ」の4テーマに分かれてのゼミ
7月20日	ふくしま復興塾事務局	デザイン思考を使ったプロジェクト立案ワーク
8月3日	株式会社umari 木戸 寛孝 様	講義：「ふくしま復興」を歴史(大局)的および哲学(普遍)的観点から捉えそのうえで「自分の軸」を再構築する
	戸 戸 慈 様	講義：ウクライナ訪問について
8月12～17日	ふくしま復興塾事務局	ウクライナフィールドワーク
9月7日	ふくしま復興塾事務局	ウクライナフィールドワーク報告会
9月21日	株式会社イワ・クリエイティブ 松田 創 様	事業立案についての講義・ワーク
10月5日	ふくしま復興塾メンター	プロジェクト立案のワーク
10月19日	木幡仁一税理士事務所 木幡 仁一 様	講義：事業計画と予算
11月2日	株式会社ビーエイ 加藤 博敏 様	講義：新しい事業の立ち上げについて
	福島県庁 玉川 啓 様	講義：行政の観点からのプロジェクト推進
11月16日	ふくしま復興塾発起人	プロジェクトの中間発表会
12月7日	ふくしま復興塾メンター	最終発表会リハーサル
12月14日	ふくしま復興塾事務局	最終発表会

## 2-1 ■ 各プログラムの概要

### ガイダンス(5月18日)

5月18日に、ふくしま復興塾の第一期が開講しました。当日は主催者側として、福島大学うつくしまふくしま未来支援センターの中井センター長と、ふくしま復興塾発起人の木幡税理士から挨拶がありました。続いて、協力企業である麒麟株式会社CSV推進部の古賀様より来賓挨拶をいただきました。その後、塾生全員が福島復興にかける思いと共に自己紹介を行いました。最後に第一回の講座として、スタンフォード大学発の課題解決の手法であるデザイン思考の説明と体験ワークを行い、初日を終了しました。



麒麟株式会社 古賀様の挨拶



デザイン思考の体験ワーク

## 浪江町フィールドワーク (6月1日)

6月1日に、警戒区域が解除されて間もない浪江町へのフィールドワークを実施しました。当日は郡山駅に集合してバスに乗り、いわき市から国道6号線を北上し、福島第一原子力発電所付近を通過して浪江町に入りました。浪江町内に入ると、まずは浪江町役場にて、震災当時に現地で勤務していた玉川様・小林様(現在はそれぞれ、出向元の福島県庁・避難先の浪江町役場二本松事務所に勤務)から、震災当時やその後の経過のお話を聞きました。そのお話を受けて、震災後2年以上が経過しても生々しい津波の傷跡の残る請戸地区や、グラウンド一杯に除染で発生した汚染土が置いてあるふれあいセンター等を視察し、帰路につきました。



元浪江町役場の玉川様



津波の爪痕が残る請戸小学校

## 福島の現状についての講義 (6月15日、7月6日)

6月15日と7月6日の講座では、福島の現状を学ぶことを目的に講義やディスカッションを行いました。

6月15日には、最初に伊達市役所で除染を担当されている半澤様より、他地域より進んでいると言われている伊達市の除染を進めてきた経緯や、除染によって発生する廃棄物の仮置き場を設置する際の住民との合意形成過程について講義をいただきました。続いて東京大学医科学研究所で、相馬市や南相馬市等での現場からの復興にも尽力されている上特任教授より、「復興は人づくりである」という信念のもと、相馬での様々な取り組みの紹介や人材の視点からの福島県の状況について講義をいただきました。

7月6日には、第一期での重点テーマとして設定していた「子供」、「産業」、「食」、「コミュニティ」の4テーマにわかれ、各テーマの専門家や実務家から福島の現状を聞いた上で、塾生同士で福島における各テーマの課題についての整理を行いました。



伊達市半澤様の講義



よつば保育園近藤副園長を交えた議論

## 福島の課題を解決するプロジェクトの立案 (7月20日、9月21日、10月5日、10月19日、11月2日、11月16日)

福島の課題を解決するプロジェクトの立案では、7月20日のデザイン思考ワークショップを皮切りに、9月21日には事業モデルに関する講義やケーススタディ、10月19日には事業計画や予算に関する講義・実践等を行いました。この間、複数回にわたって、復興塾の発起人・メンター等によるフィードバック会を開催し、最終発表会やその後の実践に向けてのブラッシュアップを行いました。



予算書の講義をいただいた木幡税理士



塾生同士での相互フィードバックの様子

## ウクライナフィールドワーク (8月3日、8月12~17日、9月7日)

8月3日には、ウクライナフィールドワークの事前講座として、株式会社umariの木戸様等により、世界の歴史の中での福島的位置づけについて学びました。8月12~17日のウクライナフィールドワーク後は、9月7日に、関係者や報道機関向けに報告会を実施しました。(ウクライナフィールドワークについては、「3 ウクライナフィールドワーク報告」を参照)



事前研修での木戸様の講義



現地での夕食時の振り返り

# 3 ウクライナフィールドワーク報告

ウクライナフィールドワークには、福島大学うつくしまふくしま未来支援センター教員・ふくしま復興塾塾生・事務局等、総勢31名が参加しました。2013年8月12日～17日(成田発着)で行い、現地での行程は下表の通りです。

日付	訪問都市	訪問先
8月13日	チェルノブイリ原子力発電所周辺	・ザリシア村 ・チェルノブイリ原子力発電所 ・プリピャチ市
8月14日	スラブチチ市	・スラブチチ市長と面会 ・街と原発ミュージアム ・社会精神リハビリセンター
8月15日	コロステン市	・コロステン市長と面会 ・州予測診断センターコロステン支局 ・社会精神リハビリセンター ・市の公園のエクスカーショント 軍事歴史施設スカラ

## 3-1 ■ フィールドワークの目的

東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故を契機に福島は世界に類を見ない複雑な課題を抱える地域となりました。福島が抱える課題は世界の、人類の課題です。この課題を乗り越えていくことは福島県民のみならず全世界中の人類にとって意味を持つはずで

す。この世界的課題にも前例があります。1986年のウクライナのチェルノブイリ原発事故です。ウクライナではその数年後にソ連からの独立も達成し、原発事故の苦難や独立の混乱を経て、時代を変えるリーダー達が産まれました。これから福島で復興を進めるリーダーになるために、ウクライナの復興や独立を目指して様々な取り組みを行ってきた現地のリーダーたちは、様々な面で福島のモデルとなるはずで

す。ふくしま復興塾では、福島の現状を把握するのみにとどまらず、福島の未来の可能性の一つであるウクライナの現地でその経験と教訓、そしてそこに住む人々の想いに直に向き合います。

今回のフィールドワークでは、チェルノブイリ原発の視察に加え、ウクライナにおける復興の象徴とも言われているスラブチチ・コロステンの両市を訪問し、市長・副市長をはじめ、リーダー達と直に交流します。

## 3-2 ■ 現地での視察内容報告

### チェルノブイリ原子力発電所

27年前に事故が発生したチェルノブイリ原子力発電所ですが、事故後に放射能拡散を防ぐために旧石棺が作られましたが、廃炉自体は現在もほとんど進んでいません。現在は、旧石棺の上を覆うアーチ状の建造物(新石棺)を作成し、新石棺の中で廃炉を進めるプロジェクトが、世界中の知恵と技術を結集して遂行されています。チェルノブイリ原発で働いている人たちの中には、事故前から働いていて、現在は廃炉に携わっている人もおり、長年働いている原発での仕事に誇りを持っている様子が印象的でした。



旧石棺



チェルノブイリ発電所内の施設にて

## スラブチチ市

スラブチチ市は原発事故後、原発作業員を中心とした原発周辺住民の移住先として作られた町です。50近い種類の民族が住んでいます。産業的な発展も達成するなど、ウクライナの復興の象徴と見なされています。原発作業員が多数住んでいたスラブチチは、2000年のチェルノブイリ原発の稼働停止により、莫大な数の失業者が出てしまいました。しかし、新石棺の建設や、シリコンバレーとの協働プロジェクト等、グローバルな施策によって雇用を創出しています。



スラブチチ市長



スラブチチ市の街並み

## コロステン市

コロステン市は、チェルノブイリ発電所の事故による放射能汚染が著しかった市で、希望があれば移住先を国によって補償されていた地域（第3ゾーン）で最大の都市です。その後の発展から、スラブチチ同様にウクライナ復興の象徴と見なされています。ウクライナの中で、平均給与や暮らしやすさの満足度が高いため、チェルノブイリ原発事故の被害地域の中では比較的人口が増加しています。例えば産業としては、特区のような制度を作り、軍の飛行場の跡地を利用しての工場の誘致等を行いました。



コロステン市の副市長



コロステン市の街並み

### 3-3 ■ 参加者の感想(一部抜粋)

福島県庁 **山田 雅文**さん

今回のフィールドワークを通じて私が得たのは、「原発事故や放射能汚染を完全に解決するにはとても長い時間がかかる」という実感です。「先端の廃炉作業を見ることができる。」と期待していたチェルノブイリ原子力発電所で見えたものは、世界中の知見を結集しながら製作を急いでいる「新石棺」でした。

つまり、汚いものに蓋をすることが、現段階において世界が選ぶことのできた最も効果的な事故対策だったのです。1986年のチェルノブイリ原子力発電所の事故から27年も経過し、かつ主要国から多大な支援を受けてもなお、廃炉や危険区域除染等の根本的な解決に至っていない厳しい現状に強い衝撃を受けました。福島の問題を解決するには長い年月がかかる、という言葉はよく聞いていましたが、その意味を初めて実感しました。

また、翌日に訪れたコロステンという都市では、社会精神リハビリセンターという公共施設を訪問しました。この施設は、原発事故で心に傷を負った人の精神的ケアや分析を無料で行う公共機関ですが、子供達が放射線の驚異を自ら避けることの出来るように子供向けの対放射線教育も重視しています。日本の公共機関における被災者への精神ケアは、保健所等の既存機関の活用にて対応されていますが、従来の仕事との兼務であることが多く、ウクライナほど踏み込んだ対応をしていません。また、福島では、行政が対放射線知識を広報することはあっても公教育として子供に放射線知識を与えているわけではなかったため、ウクライナの事例に大変驚きました。



チェルノブイリが歩んできた「27年」を今の私の年齢に足すと、自分の母親の今の年齢と同じ50歳になります。そのときには、どんな福島になっているのでしょうか。

「福島第一原発の収束作業はレベルを変えて現在進行形で続き、そこで作業員として生きてく人が増え続けていること」「放射能恐怖症に怯え生き続けている人々がいること」。これら様々な問題が、30年後の福島で生き続けていると思います。そう考えたときに、私が今の母親と同じ年齢になったときには、症状やレベルは違えど、今回チェルノブイリで見た現実を、今度は福島で、私や将来の自分の子どもは見ることになるだろうことを想像し、「30年間」という重みをリアルに感じました。

しかし今回の視察で、「生き続ける問題と向き合う人々自身が、希望を創り続けている」ということを実感できたことは大きいものでした。自らの手で新しい街を創りだしたスラブチチ市をはじめ、国民性なのか、それとも時間が経過したから感じられることなのか、ウクライナ人はとても前向きに生きていました。

- (その土地に対して)イメージが全くないということの方が悲しいこと。だからこそ、有名になった事故後、それをどう活かすかの方が大切であること
- 「負の歴史」ではなく、「勝利の歴史」のイメージをつくること
- 「大変なことが起きた国」ではなく、「大変なことを克服した国」としてポジティブに捉えていくこと

このように発想をすべてプラスに捉えていける力は、まさしく、今の福島に必要な力だと感じます。こうした物事をプラスに捉えていくことこそが、自らに「自信」を与える力になるのだと、ウクライナの人々を見て改めて思いました。

さらにウクライナの人々は、ひとりひとりが“自立”を掲げて生きている人々でした。スラブチチ市の社会精神リハビリセンターで住民にアンケートを取った結果では、60%の住民が「(事故後の)支えは、自分自身」と答えており、また、「国からお金をもらうのではなく、自分たちでお金を稼ぐことを考えている」とコロステン市の副市長は答えています。国に頼らず、自らが「できる!」と自立心を持って前進していけるのは、チェルノブイリ事故を乗り越えてきた背景とともに、ソ連崩壊という大きな社会不安定な時代と戦ってきた現れなのだろうと感じました。



# 4 最終発表会報告

ふくしま復興塾最終発表会は、2013年12月14日に、郡山市の市民交流プラザ大会議室にて開催しました。当日は、来賓として復興庁福島復興局から堀川参事官や郡山市の品川市長をはじめ、総勢127名の方にご参加いただきました(復興塾塾生等も含む)。当日は、以下の①～⑥までのプロジェクトが各15分程度の全体発表を行った他、全10プロジェクトがポスター発表を実施しました。

ふくしま復興塾発起人より、ふくしま復興塾グランプリを「夜明け市場を中心とした食の循環モデルづくりプロジェクト」が受賞し、協力企業のキリンビール様より、KIRIN賞を「福島県高齢者の健康づくりと地域コミュニティの再生～目指せ!健康長寿!～」が受賞しました。

## 発表プロジェクト

- ①福島に“つながる”弁当 プロジェクト
- ②若手福島県・東京都自主勉強会
- ③「からだあそび塾」～幼少期における日常的な「身体遊び・運動」環境づくり～
- ④福島県高齢者の健康づくりと地域コミュニティの再生～目指せ!健康長寿!～
- ⑤「幸せをわかちあう」IIEブランド事業～ふくしま復興塾を通して、復旧フェーズの支援団体から復興フェーズの持続可能なビジネスモデルへ転換～
- ⑥夜明け市場を中心とした食の循環モデルづくりプロジェクト
- ⑦福島で「繋がる」仲間づくりツアープロジェクト
- ⑧ふくしまイノベーターズカレッジ(仮)プロジェクト
- ⑨「ふくしまの被災地ツアー」大学教育プログラム化プロジェクト
- ⑩じいちゃんばあちゃんコミュニティ(高齢者が主体的に関わる地域の拠点づくり)



全体発表の様子



ポスター発表の様子



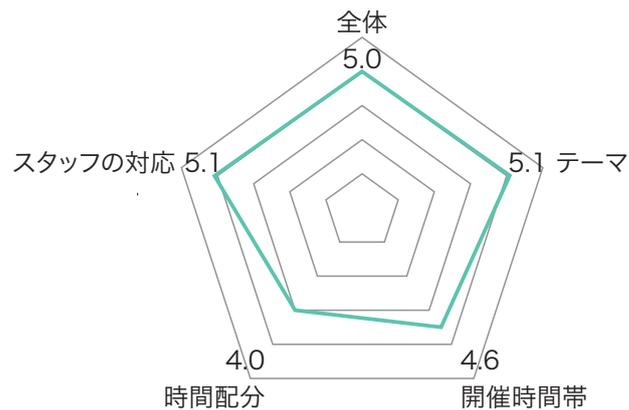
グランプリを受賞した夜明け市場の松本さん(左)と復興塾発起人の井上さん(右)



KIRIN賞を受賞した(左から)羽根田さん、小坂さん、増子さん

## 4-1 ■ アンケート結果

来場者(復興塾塾生や発起人等の関係者を除く)からのアンケートで、45人から回答をいただきました。満足度を項目別で1～6点の6段階で調査し、全体で平均5.0点と高い満足度をいただきました。



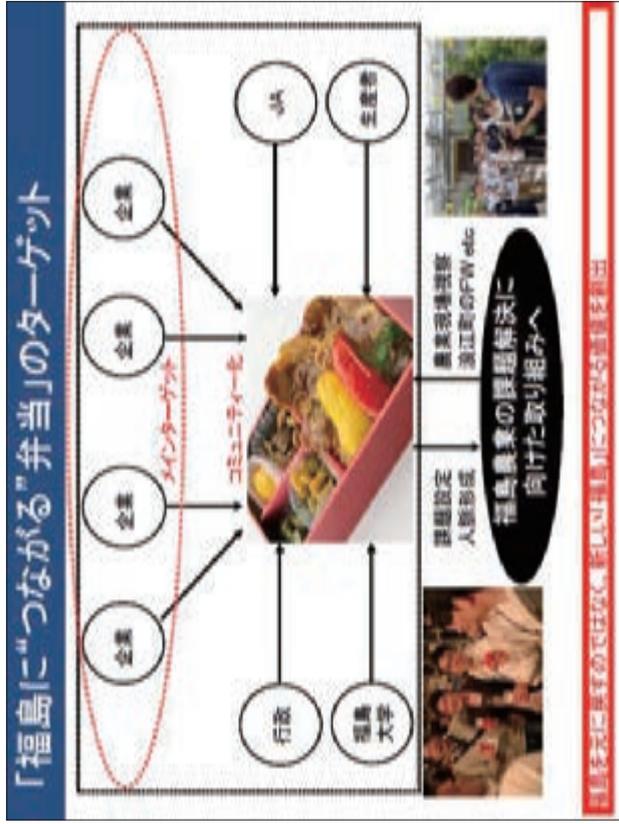
また、自由記述欄より以下のような感想をいただきました。

「ポスター発表の時間をもっとほしいと思うほど魅力的なプロジェクトが多数ありました。今後の活動に期待しつつ、実現したあかつきには消費ユーザーとして見守り、応援したいと思います。」(20代女性)

「なかなか先が見えない福島ですが、未来を考え、発表する若い人に力づけられました。」(50代男性)

「どれも素晴らしい発表でした。自分の仕事にも活かしていきたい。」(30代男性)

## 4-2 ■ 塾生の発表プロジェクト



### 「福島に“つながる”弁当」の機能

かけ紙

福島の農産物等で作られている産物や生産者の思い、喜びのメッセージが伝わる。

3ヶ月に1回のお弁当に使用する福島の食材は、7～8種類。年間の使用食材は、28～32種類(20～30農家)になる予定。

オリジナルECサイト立ち上げ

福島県産物のブランド育成、販路拡大に役立つコンテンツを製作し、売上貢献度を向上させる。

### 「福島に“つながる”弁当」初年度の効果

- 初年度売上目標  
 $24,000 \text{食} \times 1,000 \text{円} \times 40\%$  (福島の食材調達費の占める割合)  
 $= 9,600,000 \text{円}$  (福島生産者への売上貢献額)
- 初年度寄付金目標  
 $24,000 \text{食} \times 50 \text{円} = 1,200,000 \text{円}$  (復興支援活動に充当)
- 初年度Facebook利用目標  
 $24,000 \text{食} \times 40\%$  (Facebook利用率)  $\times 10\%$  (投稿割合)  
 $= 960 \text{人}$  (情報交流が生まれる回数)

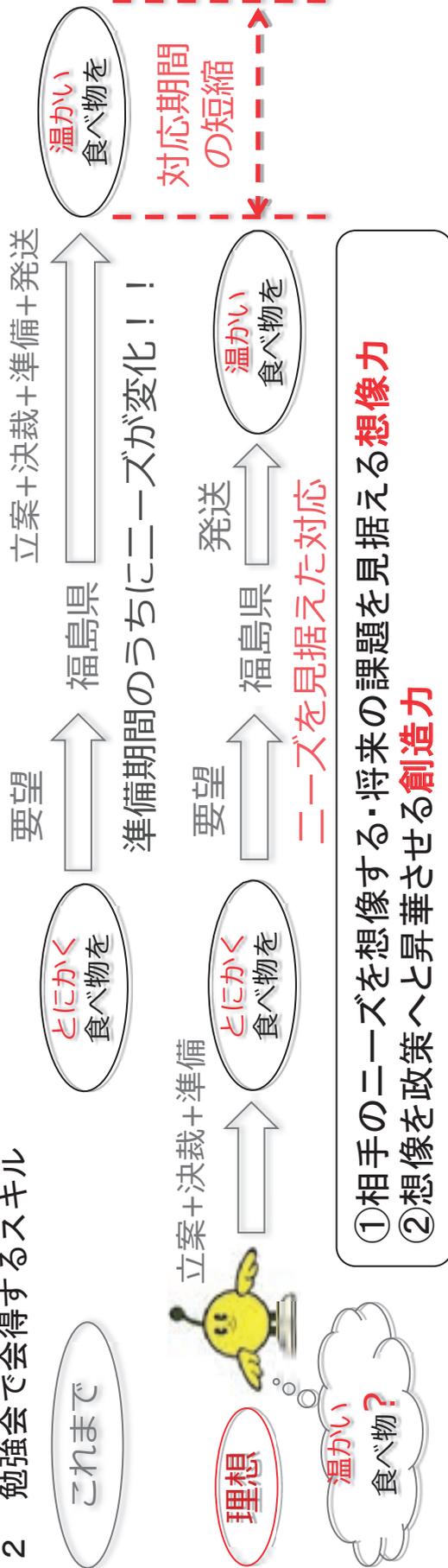
### 「福島に“つながる”弁当」今後の展開

- 3ヶ月に1回のお弁当で新商品を開発(春・夏・秋・冬)  
 - 1種類のお弁当に使用する福島の食材は、7～8種類。年間の使用食材は、28～32種類(20～30農家)になる予定。
- 来年3～4月にかけて、企業向けのF/Wを開催予定  
 - お弁当を購入いただいた起業のCSR担当者を中心にコミュニティを形成し、福島の真の課題を把握するF/Wを行う。
- オリジナルECサイト立ち上げ  
 - 福島県産物のブランド育成、販路拡大に役立つコンテンツを製作し、売上貢献度を向上させる。

# 若手福島県・東京都職員自主勉強会

1 目指すもの 県民・都民の想いを受け止め、解決策を生む器となる！

2 勉強会で会得するスキル



3 スキルアップのための2つのプログラム



**自主勉強会参加者募集中！**

自主勉強会の開催に向けて、①勉強会に参加したい行政職員②勉強会を支援してくれる方(ワークショップのファシリテーターなど)を募集しています。

事業：「からだあそび塾」～幼少期における日常的な「身体遊び・運動」環境づくり～  
 メンバー：村上和広・佐久間慧・遠藤江里子・菅家元志

プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景  
 子どもたちの運動不足、日常（自宅、近所）における身体を動かす機会の減少を解消したい。

**社会的背景・課題**

【拝啓】東日本大震災およびそれに伴う原発事故後、放射線への不安等から福島の子もたちは身体を動かす機会を奪われており肥満の増加や運動能力・体力の低下といった問題が顕在化  
 【課題】日常（自宅、近所）における身体を動かす機会を制限された結果として生じた子どもたちの運動不足

**ターゲット・ニーズ（具体的事例等を交えて）**

【保護者】震災後、子どもは屋外で遊ぶことが減り屋内で遊んでばかり・・・運動不足が心配ではあるけど、どうしたら良いかわからない。  
 屋内でも身体を動かして遊べればと思うが、どのように身体遊びをすればよいか分からない。  
 【子ども】楽しく身体を動かしたい

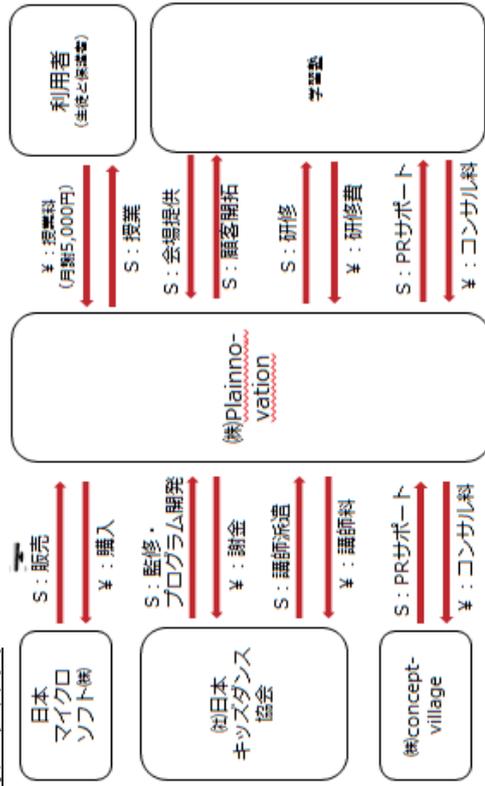
**将来的なビジョン・目的・目標**

・まずは学習塾に導入、その後、保育園・幼稚園、児童クラブや小学校にも導入をはかる。  
 ・子どもたちの運動習慣の定着を促す社会的インフラになることで、日本中の子どもたちが運動好きに！

**解決策・事業概要**

【概要】マイクロソフト社のゲーム機器「Xボックス・キネクト」を活用した身体遊び授業プログラム「からだあそび塾」をパッケージで学習塾へ提供。  
 【流れ】  
 ・授業前：毎月1回、からだあそび塾の講師向け研修を開催。  
 ・授業中：講師が毎回選んだテーマの「からだあそび」の授業を実施。（授業の様子を撮影）  
 ・授業後：録画データを子どもが持ち帰り自宅のPC等で復習。学んだ「からだあそび」を子どもが保護者の前で発表したり、保護者の方も一緒に「からだあそび」を楽しむことが可能。

**事業モデル図**



**プロジェクトの特徴（社会的意義・波及効果・新規性等）**

- ①生徒と保護者・・・子どもの運動不足の解消。親子で「からだあそび」を学ぶことが出来る。子どもと大人のコミュニケーション活性化。
- ②学習塾・・・空き教室の有効活用。新規顧客へのアプローチ。PRの機会となり認知度向上。福島の子も支援による企業価値。ブランドの向上。産休などにより長期休暇していた女性スタッフの会社復帰。または現場感を取り戻すきっかけ。
- ③日本マイクロソフト社・・・自社商品の売上増加。福島の子も支援による企業価値。ブランドの向上。
- ④日本キッズダンス協会・・・ダンスインストラクターの雇用創出。

**進める上での課題・協力をいただきたいこと**

- ・企業協賛：プログラム開発費および運営費としての資金提供
- ・本事業に興味のある学習塾様との繋がり

## 「福島県高齢者の健康づくりと地域コミュニティの再生～目指せ！健康長寿！～」

### コミュニティチーム@ふくしま復興塾

増子 理子 (郡山西部地域包括支援センター勤務)、羽根田 啓子 (ふくしま観光復興支援センター勤務)  
小坂 勝洋 (郡山医療生活協同組合勤務)

### プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

震災後、「同居していた息子家族が避難し1人暮らしになった」「郡山へ避難してきたが知り合いがない」など、それまでとは一変した生活を送る高齢者を目にしてきた。地域の人が有機的につながり、いきいきと生活ができる地域を目指したい。

### 社会的背景・課題

高齢者は、震災後、外出が減り筋力低下や閉じこもり傾向が顕著になり、要支援、要介護者が増加している。今後、認知症や精神疾患などが増加すると予想されている。

### ターゲット

将来的に要介護状態となる恐れのある高齢者  
ニーズ  
日常的に介護支援を必要とすることなく、自立した生活を長く続けたい

### 将来的なビジョン・目的・目標

- ・福島県内の高齢者 (県人口の26.8%) の健康寿命を延ばす
- ・高齢者を孤立させないコミュニティの再生

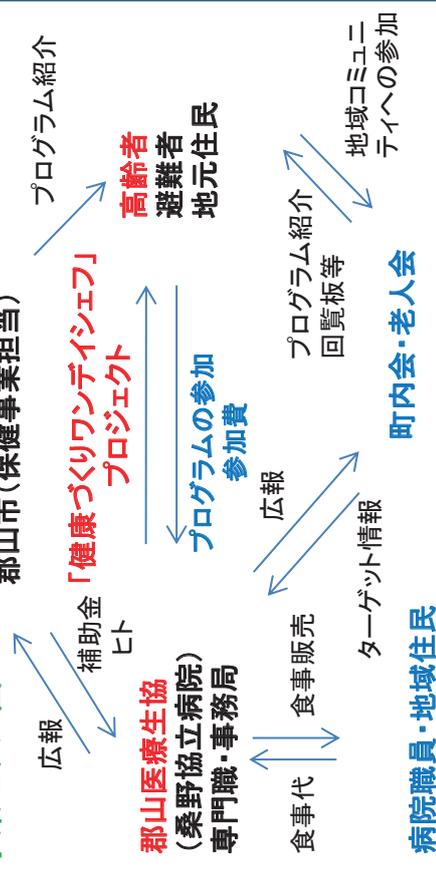
### 解決策

メタボ・ロコモ・認知症の負のトライアングルを断ち切る

### 事業概要

高齢者が集まりやすい病院や介護施設で、「ワンデイシェフ」を実施し、ランチを販売する。さらに、管理栄養士などの専門職と協力して「食」を学び、医療と連携したプログラム(理学療法士の指導のもと運動の実践や、継続した健康管理と相談の場)を設け、参加者同士の交流を図る。

### 事業モデル図



### プロジェクトの社会的意義

【健康づくり】

高齢者…メタボ、ロコモ、認知症予防 ⇒ 自立した生活  
社会…健康寿命の延長 ⇒ 医療費・介護費の削減

【コミュニティの再生】

高齢者…人とつながる ⇒ 知り合いができる ⇒ コミュニティ参加  
社会…地域のつながり ⇒ 無縁社会の解消  
【事業主体のメリット】  
地域貢献 患者・利用者の獲得

### 進める上で協力をいただきたい方

各地への拠点拡大を見据え、情報交換を進めつつ協力頂ける方。

# ポスト311の「お福わけ社会」を創造するIIEブランド事業

～ふくしま復興塾を通して、復旧フェーズの支援団体から復興フェーズの持続可能なビジネスモデルへ転換～

谷津拓郎、小笠原隼人、高橋恵子

**会津木綿商品を使った生きがい内職を提供する事業**  
復旧フェーズ:2011年3月11日～ 形態:支援団体

すぐ近くに理不尽にも窮屈な生活を強いられる方がいる中で、自分だけ飄々と日常生活に戻ってしまっているのだろうか。何か自分たちが力になれることはないだろうか。

福島第一原発事故の影響で原発30km圏内の市町村住民は避難生活を余儀なくされた。知らない土地で慣れない窮屈な生活を強いられ、多くの方が先の見えない不安の中にあっただ。

大熊町、檜葉町から会津地域に避難している30～70歳の女性「何もすることがないのが辛い」「社会とのつながりが欲しい」「生きがい欲しい」

会津に避難している人たちに、会津を好きになって帰って欲しい。会津で新しい生活の生きがいを見いだして欲しい。あわよくばそのまま住み続けて欲しい。

会津木綿の手仕事内職を通して生きがい仕事づくり事業を通して、避難先地域での新しい第一歩を応援する。  
初めは、ミシン内職を中心とするが、得意でない方も多く、ミシンを使わない誰でもできる仕事づくりに転換→ストールのフリジ内職の誕生。  
敢えて技術を下げること、仕事づくりの価値が生まれた。  
会津の伝統工芸である会津木綿を用いることで、商品の差別化をはかるとともに、作り手の方達が避難先地域の文化に触れる機会を創出した。

**ふくしま復興塾**

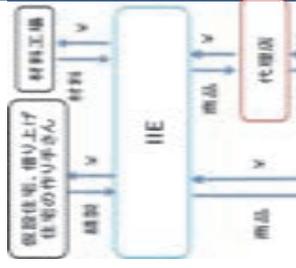
**想い**

**社会的背景課題**

**ターゲットとニーズ**

**ビジョン目的**

**解決策 事業概要 事業モデル図**



**ポスト311のライフスタイルを創造するブランド事業**  
復興フェーズ:2013年3月11日～ 形態:株式会社

誰かの不幸せの上に成り立つ幸せはもう嫌です。みんなが一緒に幸せになれるような社会を僕らがしっかりと創って、次の世代の子供達、孫達につないでいきたい。

311はこれまでの経済成長を前提とし無尽蔵に資源を浪費して行く我々のライフスタイルには限界があることを気づかせるきっかけとなった。しかしながら、現実には311以前と変わらない生活に留まり、矛盾を抱えた生活に息苦しさを感じている。

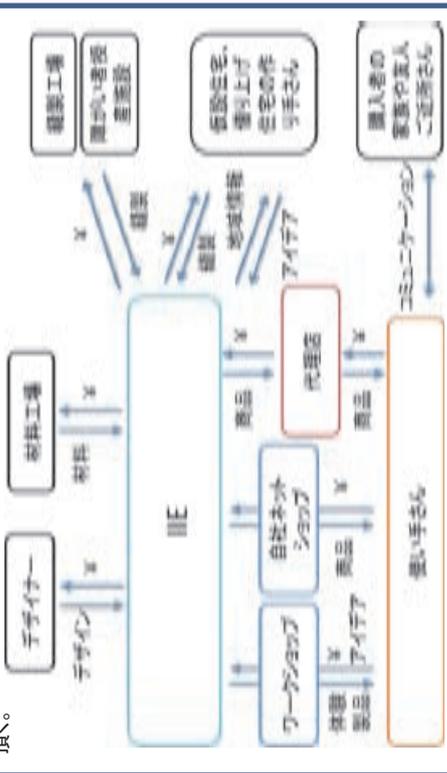
子供のいる若い夫婦、主婦(=作り手さん達の属性) 家族や友人、ご近所の人々など、周囲の人と幸せを分かち合う心豊かな生活を送りたい。それを現在の生活水準を下げずに便利に実現したい。家族との時間を大切に過ごしたい。友達や職場の人とも気持ちのいい関係でありたい。

自分たちの子どもや孫達に、「生まれてきてよかった」と思えるような社会をつなごう。そのためには、まずその親である女性が幸せな生活を送れる地域社会でありたい。

①生活・服飾雑貨事業②ネットショップ事業③ワークショップイベントを通して、福島から新しいライフスタイルの提案を行う。

これまで同様、地域資源を現代的デザインで日常生活に落とし込んで行くというスタイルを継続しつつ、購入後のコミュニケーションも含めて商品デザインを行う(例、既存商品を購入の際に会津木綿ノベルティの入った御福分け(お裾分け)と同意)袋を付けて、それを友達にプレゼントしてください、というもの。

もう一つの新しい特徴として、購入者一人ひとりにより自分らしい商品と提案する工夫を行う。これまでも用いていた会津木綿の豊富なカラーバリエーションと、今後増やして行くワークショップコンテンツの充実により、自分で創る一点物を楽しんで頂く。





# 夜明け市場を基点とした福島の食の循環モデルづくりプロジェクト

## メンバー：松本文

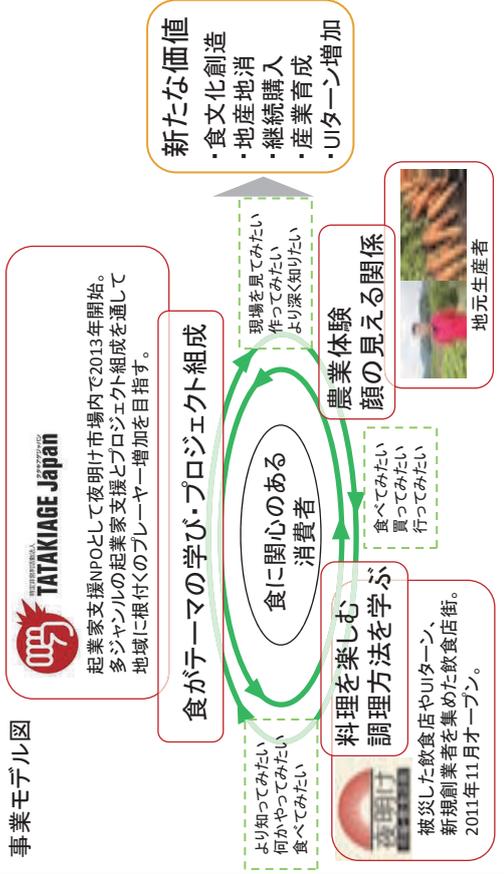
プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景  
 飲食街としての夜明け市場と起業家支援団体としてのTATAKIAGE Japan、そして地域の生産者を連携をさせることで、福島の食を通して“新たな価値”をつくれな

**社会的背景・課題**  
 福島の食は、今までと同じようにただ作っただけでも風評被害で売れない。全国の応援消費もいつまで続くか分からない。その状況を変えるには、消費者に無理なく興味を持ってもらい継続的消費に結びつける仕掛けが必要だと考えています。

**ターゲット・ニーズ(具体的事例等を交えて)**  
 食に関心のある消費者の、美味しい地域独自の食文化を、楽しみたい、買ってみたい、行ってみたい、知ってみたいという潜在ニーズにリーチする。  
 例えば、美味しい料理や商品がきっかけとなって、その作り手や生産地のことを知りたがり、実際に行ったりということを、これまで食材のみで勝負していた福島から行って

**将来的なビジョン・目的・目標**  
 福島の食を、応援しよう⇒食べたい！！に。  
 そして福島を、若者が出て行ってしまふ場所⇒チャンスに溢れるUターン者の聖地、にしたいと考えています。

**解決策・事業概要**  
 風評被害対策を目的とせず、「地域の食文化を楽しんで頂く」「付加価値をつけていく」ことで、結果として風評被害がなくなるようにする。  
 1. 食に関する学びとプロジェクト創造をTATAKIAGE Japanで行う。  
 2. 農家や生産現場に誘導し顔の見える関係を構築しファンになってもらう、そして、直接消費のチャンネルを農家に持ってもらう。  
 3. 収穫した野菜を、夜明け市場で調理してもらい、美味しく食べられる。食べ方を学べる。1へと循環。



**プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)**  
 風評被害対策を越えて、地域の食文化を創造することを狙っています。楽しい、知識も増え、食生活が豊かになる、というターゲットの価値を提供することで、結果としてどこにも負けない福島の食ブランドと継続消費の流れをつくりたいと思っています。

**進める上での課題・協力をいただきたいこと**  
 ・パイロットプロジェクトである、100%いわき産野菜スムージー「Hyacconi(ひゃっこい)」が、クラウドファンディングサイト「チャレンジスター」に応募しているの、出資並びに情報拡散のご協力をお願いします！  
 ・長期目標である起業家育成・Uターンの促進のために、いわきでのプロジェクト推進に関わって頂ける方を募集しています！

# 福島で「繋がる」、仲間づくりツアープロジェクト

チームもうすぐ社会人

## メンバー：吉田哲朗(福島大学4年) 板里彩乃(青山学院大学4年)

### プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

企画者と同世代の大学生は、大学生生活初期に震災を経験し、大学生生活特有の余暇の時間を利用して復興支援活動を行ってきた人が多くいる。しかし活動の中で社会課題の実感やそれに対して行動していくことの大切さを痛感しても、大学を卒業し社会人になる段階で自分自身の将来への不安からそれらの課題に取り組むことを辞めてしまったり、諦めてしまうケースも多い。

企画者二人も同じように、社会人になってからも社会課題に取り組みたいという思いを持ちつつも、現実的にそれが可能なかどうかという点で不安を抱えている。しかし2013年夏にチェルノブイリ、吉田は秋に熊本県水俣市を視察した際に「現代社会の限界」と「変わらなければいけない」「どうにかしないといけない」という強い思いを感じ、その不安に対して大きな変化があった。

### 社会的背景・課題

・現代社会の発展を支える過程で起こった事故により、大きな被害を受けている人たちがいる一方で、それを忘れていったり、あるいはそれらの被害よりも経済発展や利益を優先してきた社会的背景

### ターゲット・ニーズ(具体的事例等を交えて)

【これまでの事故での被災者】自分たちの経験を語り継げず、再び事故が起きてしまったことへの後悔と無念をもつ人、語り継ぎたいと思っている人  
 【福島と向き合ってきた大学生】①福島の課題に取り組んできた人②社会人になってからも社会課題に関わる意識を持ちたいという人

### 将来的なビジョン・目的・目標

社会人になってからも社会課題へ取り組むキッカケと仲間づくり。  
 また、その仲間コミュニティから課題解決へのアクションが起こること。

＜企画者の目標＞データツールズムの活性、事業化の調査

### 解決策・事業概要

福島と類似する課題を抱えてきた熊本県水俣市のフィールドワーク。  
 事前事後にワークショップを開催し、水俣を感じたことを参加者全員が言葉にしてブログやメディアを通して発信する。参加者間でコミュニティをつくり、ツアー後も社会課題に向き合う仲間をつくる。

＜企画者の目標への解決策＞水俣市民との交流。ゆくゆくは福島でのデータツールズムツアー企画を念頭に入れつつ、水俣でデータツールズムツアーを開催する。ツアーの効果検証→参加者の事前と事後の気持ちや行動の変化、語り部となる被災者の心理的負担や想いを理解する。

### ツアープラン(3泊4日)

#### 【1日目】

- ・水俣湾フィールドワーク(相思社ガイドの案内によって)
- ・水俣病資料館・エコパーク見学
- ・相思社にて、水俣支援者と交流会

#### 【2日目】

- ・水俣病患者との対話
- ・行政職員との対話／水俣のまちづくり施策について質問会

#### 【3日目】

- ・愛林館にて村まるごと博物館の施策を見学
- ・地元若手リーダーとの対話会

#### 【4日目】

- ・エコネット水俣見学
- ・水俣の若手・熊本大学の学生らとワークショップ

### プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

- ・企画者自身が参加者としてデータツールズムに参加し、その意義の大きさを実感した経験から、企画していること。
- ・「見る」に留めずに、「知る」に留めずに、参加者が自分自身の課題として社会課題を捉えること(＝社会課題の自分事化)を目指していること。

### 進める上での課題・協力をいただきたいこと

- ・資金
- ・参加者の募集



# 「ふくしまの被災地ツアー」大学教育プログラム化プロジェクト

メンバー：ふくしま復興塾 高橋あゆみ（福島県出身／福島大学卒／インターンシップコーディネーター）

## ●プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

東日本大震災後、福島大学生は避難所運営や仮設住宅での住民支援などに自主的に取り組んできた。学生の自主的活動の中で、福島県内で被災地ツアーを企画運営した「スタ☆ふくプロジェクト」は2013年6月、観光庁主催の第1回「今しかできない旅がある」若者旅行の表彰で東北ブロック賞を受賞した。彼ら彼女たちは、ツアー企画を通して地域の魅力や課題を掘り起し、地域住民に活力を与え、さらにはツアー後も地域の「語り部」的存在となった。それだけでなく、彼ら彼女たちはその中で、福島や震災に対して見方が変わり、福島への愛着や当事者意識を持つようになった。このことから、このツアー企画が「教育プログラム」として大学のプログラムとして活用できるのではないかと考えた。

## ●社会的背景・課題

- ・震災から2年半が経ち、学内でボランティアや社会貢献活動を行ったことのある学生が減っている ⇒ 将来の福島の担い手不足
- ・双葉八町村をはじめとする被災地から若者が流出している

## ●ターゲット・ニーズ

- 【ターゲット】 福島大学2年生（全学類）、福島の震災復興に興味があるが何から手をつけたいかわからない学生
- 【ニーズ】 福島で何が課題か、何を求められているのか知りたい

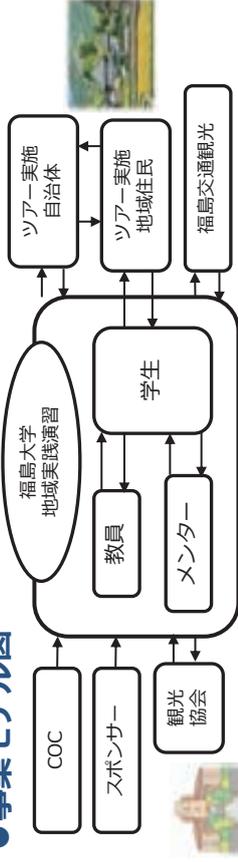
## ●将来的なビジョン・目的・目標

- 【目的】 ・学生地域実践ノウハウ（課題発見～課題解決の力）の醸成  
・地域課題の新たな発掘
- 【目標】 1年間で福島に当事者性を持つ学生を30人増やす  
※平成27年度～のふくしま未来学のカリキュラムへの導入を目指す

## ●解決策・事業概要

- 福島大学 地域実践学習「ふくしま被災地ツアー」（仮）の実施
- ・通年プログラム（2年前期～後期） ・受講生 30名想定
  - ・学生の自覚と課題発見を深化させる事前、事後研修を設ける
- ①ツアーミニ会社をつくる（10人1グループ）  
※役職、コンセプト、関係者・スポンサー交渉、現地視察もすべて自分たちで行う
  - ②ふくしま被災地ツアーの企画・運営実施  
※ツアー実施自治体：南相馬市、伊達市、川内村、広野町、福島市、（新地町）  
※ツアー参加者は、福島大学1年生を想定
  - ③ツアー企画の検証と、新たな地域課題を踏まえた改善案立案

## ●事業モデル図



## ●プロジェクトの特徴（社会的意義・波及効果・新規性等）

- 【地域】 ・学生が地域コミュニティに入っていくことによる地域活性化  
・地域の新たな魅力や課題の掘り起し  
・地域への新たな人（若者）の流入の機会  
※ツアー参加者を大学1年生にすることで継続的な関わりが可能に
- 【学生】 ・ツアー企画運営を通して、学生が地域の「語り部」となる  
・問題発見、課題解決能力の向上  
・プロジェクトマネジメントのスキルの習得  
・地域の新たな魅力や課題の発見、問題意識の醸成

このプログラムで見つけた自分の気づき・地域の課題を「マイ・プロジェクト」化し実施する科目（3年次履修）を設けることで、継続的に地域のつながりをつくりながら、学生の力を伸ばしていく。

## ●進める上での課題・協力をいただきたいこと

- ・学生チームを支えるメンターとなっただけの方の募集
- ・ツアー実施地域の住民とコミュニケーションをとれる方の発掘
- ・COC予算に頼らない資金繰り
- ・教育指標づくり

## ■プロジェクト名：じいちゃんばあちゃんコミュニティ(高齢者が主体的に関わる地域の拠点づくり)

■メンバー：小林紀子(コミュニティグループ)

## ■プロジェクト立案に至った企画者の思い・背景

一日中家に引きこもり、外出の機会が少ない高齢者の現状を見て、そのように過ごすことだけが余生の過ごし方ではないのではと感じていました。畑仕事、針仕事、地元には伝わる料理の伝承、孫や近所の子どもたちの面倒を見る等、高齢者がこれまで培った経験とスキルを地域に伝播することこそ高齢者の持つ大きな役割であり地域財産であると思っています。それらをしまっておくのは惜しいことであり、自分の祖母の姿と重ね合わせ、何よりも高齢者もいきいきとした余生を過ごしてほしいという思いがこの事業の出発点となっています。

## ■社会的背景

東日本大震災後、福島県内では原発事故や津波被害の影響で多くの住民が避難を余儀なくされた。圧倒的人口の移動、流出で県内の従前地域での地縁関係(コミュニティ)は大きく崩壊し、コミュニティが分断され再生されにくい状況にある。

## ■課題

- 高齢者の地域との関わりが希薄化(地域での役割がない/少ない)
- 震災以前からの地域無縁化の傾向+震災後の新しいコミュニティ

## ■ターゲット

- ・福島県域に居住し、家に引きこもりがちで外出の機会が少ない高齢者
- 一従前地域に居住する高齢者
- 一震災を機に避難されてきた高齢者

## ■ニーズ

- ・福島県域に居住する高齢者
- 一地域と関わりたい、生きがいを見つけたい

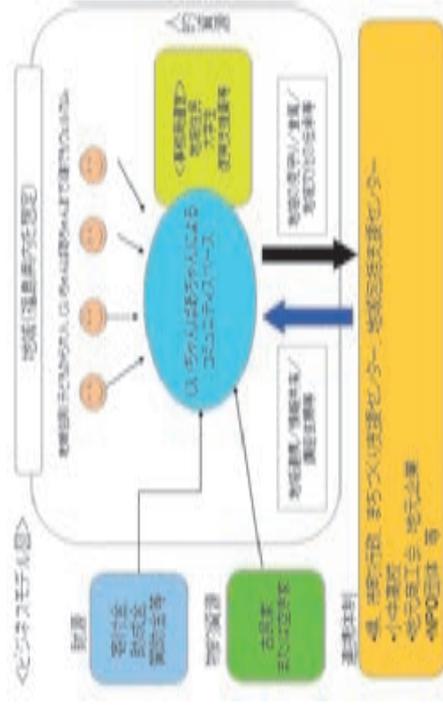
## ■将来的なビジョン・目的・目標

- 高齢者が集まれる拠点づくり(高齢者にとつての楽しみ、生きがい創出、孤独感の解消)
- 高齢者だけでなく、地域を構成するあらゆる人をまきこんだまちづくり(「誰でも集まれる拠点」を目指す/「地域を育てる」循環づくり、人のつながりを編み直す)
- 高齢者の地域における役割創出(地域の見守り/幼稚園や小学校等への食育出前講座/地域文化の伝承等)

## ■解決策・事業概要

- 誰でも集まれる拠点づくり(古民家や空き店舗等を利用したコミュニティスペース)
- ワークショップやイベントの開催(地域の伝統食等のワークショップや週末のイベント等)
- ⇒これらを通して、じいちゃんばあちゃんも地域に主体的、自発的に地域に関わることのできるコミュニティの渦を生み出す。

## ■モデル図



## ■プロジェクトの特徴(社会的意義・波及効果・新規性等)

誰でも集まれる拠点を創出することによって、本事業計画の目的である「高齢者が集まれる拠点づくり」「高齢者だけでなく、地域を構成するあらゆる人をまきこんだまちづくり」の達成が見込まれるほか、中長期的ビジョンとして、地域における役割(※例)が創出され、高齢者が主体的、自発的に地域への関わりを持つという波及効果が見込まれる。

※例：地域の見守り

幼稚園や小学校等への食育出前講座

地域文化の伝承等

## ■進める上での課題・協力をいただきたいこと

提案やアドバイス等をしてくださる方、このプロジェクトに興味をもってくださる協力者がいらっしやれば幸いです。

# 5 実施結果

## 5-1 ■ 塾生からの声

郡山西部地域包括支援センター(郡山医療生協) **増子 理子さん**

これまで、ソーシャルワーカーとして働いている中では、自分がやっていることを客観的に見る機会がありませんでした。しかし復興塾に入り、全く違う職業や立場の人と関わり、自分のやっていることに対する外からの視点によって新たな気づきがありました。例えば、震災後すぐは、福島状況を悲観的に捉えていましたが、復興塾で会った人との話やウクライナ・チェルノブイリに行ったことで考え方が変わりました。福島には課題を解決することで価値を産み出す可能性があるという外からの視点を知り、その視点を自分の中に落とし込むことで、福島を過大評価も過小評価もせずに一歩引いた視点からも見れるようになったという変化です。

最終発表会で発表した「福島県高齢者の健康づくりと地域コミュニティの再生」プロジェクトは、私が日常的に仕事で接している人たちから感じていたニーズから出てきたものです。以前から、潜在的には「やらなきゃ」という気持ちがあったと思いますが、チームメンバーと議論をする機会ができたことで形になりつつあります。今は、所属している法人に持ち帰って実現に向けて動き出しています。



株式会社夜明け市場取締役 **松本 文さん**

震災後、福島県いわき市にUターンし、飲食店街を改装してプロデュースする「夜明け市場」を起業しました。しかし、震災後2年以上経ち、「復興飲食店街」というブランディングにいつまでも乗っかってはいけないと感じていて、その後の方向性に迷っていました。復興塾に入ったのは、新たな福島に関わる人たちのネットワークを作り、事業の次の展開へのヒントを得るためです。

実際に受講してみると、歴史的な視点からの福島の現在の位置づけなどを学び、「復興」の時期が終わった後も、普通の町づくりにおさまらない大きな視点やビジョンを得ることができました。また、県内外からサポートをしてもらった協力者を得られたことも大きな収穫です。







福島復興を担う次世代リーダーを育成する「ふくしま復興塾」。12月14日、第一期生のビジネスプラン最終発表会が郡山市で行われた。

2013年5月の開講以来、8カ月間にわたって学んだ成果として、塾生たちが福島復興につながるプロジェクトを発表。「夜明け市場を基点とした食の循環モデルづくり」プロジェクトを発表した松本丈さんに聞かれた。

# の成果を問う

## チェルノブイリの現状から福島を考える

今回二期生として学んだのは主に20〜30歳の25名。福島在住・出身者はかなり多く、復興に思いを持つ地元出身者も含まれ、一般企業に勤務する人や復興関連の事業をすでに立ち上げていく人、行政職員や大学生など、さまざまな背景を持つメンバーが集まった。

プログラムの基本は隔週土曜日に開催された講義やディスカッションだが、もちろん座学ばかりではない。講義間もない6月には、さっそく福島の現状リサーチとして浪江町でフィールドワークを行い、8月には6日間の行程でウクライナに視察旅行に出かけた。

浪江町のフィールドワークでは、復興塾メンターでもある福島職員



チェルノブイリ視察で訪れた原 子館を模った石塔  
開校直後に行われた浪江町でのフィールドワーク

と浪江町職員の家内で現地に向かい、

申請や合議から見える原質の爪痕を目の当たりにした。奇跡的に食料が助かったという町立浪江小学校の跡地の詳細は、津波が来た時刻で止まったまま。町の運動場には今も大塚の陸上トラックが残り、除染の跡を体感したという。

ウクライナ訪問の目的は、グロバルかつ歴史的な視点から福島の現状をとらえ直し、復興に取り組む意義を改めて認識することだ。废墟となったチェルノブイリ原発周辺の村や、避難先となったスラブチチ市と原発から100キロほど離れたコロスチン市を訪ね、市長・副市長やチェルノブイリ観光プランナーなど、復興を牽引してきたリーダーと話を聞いた。事故から27年を経てもなおほとんど痕跡が薄くない現状を、現場作業員に直接聞き、福島復興には長期的にわたる覚悟が必要なることを改めて突きつけられた。チェルノブイリを「観光地」として、事故の現実を伝える計画を聞いたスラブチチ市長のリーダーシップに刺激を受けた塾生も多い。

## 細やかな個別指導と塾生同士の学び合い

事業立案や事業計画、予算の立て方など、ビジネスの第一線で活躍する講師陣から徹底的に指導を受けられるのも復興塾の特長だ。事務局を担った佐藤達朗さんは、プロジェクト学習の過程で講師やメンターに個別指導を受け、1回ごとにブラッシュアップできたことが成長につながったと評価する。

塾生の発表で共通して聞かれた成



現地ではスラブチチ市長ほか関係者を訪ねた



食、コミュニティ、学校、産業のテーマ毎に分かれて議論やグループディスカッションを行った

果の1つに視野の広がりがあげられる。2つに復興塾が「チェルノブイリ」を受賞した松本丈さんは、入塾時にはすでに食ビジネスを立ち上げていたが、「別々に考えていた複数の事業を連携させるべきだと腹に落ちた。それには地元の人を巻き込みたい」と、新たなプレイヤーの存在に気づいたという。

復興塾に協力しているキリンビール(株)提供の「KIRIN賞」を受賞した一高産者の健康づくりと地域コミュニティの再生(「プロジェクティブ再生」)プロジェクトのチームの小坂洋平さんは、「医療機関に勤務する私は、専門的な領域だけに視野が狭くなりがち。立場の違う塾生との出会いで、新しい視点を持つことができ、病院と地域の連携を盛り込んだ提案ができた」と語る。

### 「夜明け市場」を基点とした食の循環モデルづくりプロジェクト

#### 食・人材育成・起業家支援

## 「夜明け市場」を基点とした食の循環モデルづくりプロジェクト

**背景・課題** 飲食店事業者は震災で店舗を失い、仕事を再開できないでいた。いわき市で2011年11月、伊勢の親れと大塚が新に復興飲食店「夜明け市場」をオープンし、事業が再開された一方、県評議員の影響で、福島県食は従来の同じ方法では採れない状況が続いている。「夜明け市場」を基点に、食の生産者、食を食する分野の起業家、そして消費者の連携を生み出し、福島県食の循環モデルを構築する。

**背景・課題** 「夜明け市場」12店舗からスタートし、今は11店舗が入り、軌道に乗っている。飲食業以外に食の場はいくつで活躍する人材を増やすため、2013年春に起業家支援を目的としたNPO法人「TATAKAE JAPAN」も設立。復興塾で学ぶうちに、農業など地元生産者をプレイヤーに加えることで、食の循環を軸として、消費者が活躍できるモデルがまとまってきた。現在進行中の新プロジェクトは、「Hyakoku (1000)」と名づけた100%いわきの産物メニューの開発。

安全性が確認された食材を最高のレベルで加工し、付加価値をつけて販売。農家、フランス料理店、製菓会社など、いわき市の企業・団体の力を活用して取り組んでいる。

一連の事業で実現したいことは、福島県食を「応援しよう」から「食べたい」に変えること。そして消費者が思いっきり福島産をダンスアップするリターン・イノベーションの環境に変えることだ。

#### 雇用

## 全津木綿を使用した手仕事プロジェクト

**背景** 30ヶ町村圏内の農村住民は農業生活を営みながら、先の見えない不安を抱えている。プロジェクト発案者の経験である会社にも大規模な被災からの避難者が大勢いたが、「何もすることがなくて辛い」「社会とのつながりが欲しい」といふ。生き甲斐を失っている方も多い。

**背景・課題** 農業生活をしている人に、伝統的な津木綿を使った商品を手作りする内職の機会を提供し、生きがいと仕事ついでを通じて生活を持てる。産品はさまざまな食へのスタイルで、ミレンジや手織り人も参加できるように、スタイルのオプションをつくる手仕事からスタートした。

発案者の会社仲間が2011年の秋から行った北(イ)ブランド事業を復興塾のプロジェクトとしてブラッシュアップ。震災前から復興への移行に伴い、ブランドビジョンを「食べながら楽しむこと」と定め、2013年3月以降の販売実績は、セール約1200枚。現在15名の作り手と今後増やすとともに、会社仲間以外にも開かれた地域産産や文化を継承し、商品化につなげたい。

#### 福祉・健康

## 健康づくりワンデイシェフプロジェクト-研修生・健康指導-

**事業概要** 震災後、県内の高齢者は地域とのつながりが分断されてしまった。結果外出の機会が減って、地方都市や農村に高齢者が集まっている。要支援・要介護者も増加している。高齢者の健康づくりと地域コミュニティの再生が課題となっている。

自発的に要介護状態となる恐れのある高齢者を対象とした「健康づくりワンデイシェフ」プロジェクトを再開し、メタボ、ロコモ(運動機能低下)、認知症という3つのトライアングルを軸に、健康寿命を延ばす。

**背景・課題** ワンデイシェフとは、日替わりメニューによるコミュニティ・レストラン。料理のメニューを考え、実際にメンバーが調理することで認知症予防、同時に健康増進の指導をしながら、健康メニューを提供することでメタボを改善、ロコモ対策として健康チェックや体操なども取り入れる。

第1回のプログラムを半年間で1期として、2014年度は40名にアプローチ予定。徐々に実施場所を増やして、向こう3年間で250名の高齢者にプログラムを提供を目指す。高齢者が元気に人とつながることが地域コミュニティが活性化し、いわゆる「無縁社会」の解消につながることも期待できる。

---

## 2013年度ふくしま復興塾事業報告書

平成26年3月発行

編集発行：ふくしま復興塾実行委員会  
(福島大学うつくしまふくしま未来支援センター内)  
〒960-1296 福島市金谷川1番地  
電話 024-504-2865  
FAX 024-504-2865

印刷所：日進堂印刷所

---





チェルノブイリ原子力発電所にて